

ゲーテの「ファウスト」試論

—“真面目な戯れ”の意味について—

中 野 和 朗

1. はじめに

多様な人間のさまざまな生きざまを目の前に示してくれるのが、文学であり演劇である。これらを享受することは、まことにささやかな一つの小世界である自分の人生とは違った人生を発見することである。人間にとって、発見することは悦びであるから、文学や演劇に接することは悦びなのである。古典とはこのような悦びを時代や空間を超えて常に新しく私たちに与えてくれる作品のことである。古典を一つの固定した評価の中に押し込めておくことはできない。ゲーテの「ファウスト」と言う作品もこのような作品である。

ある作品を正しく解釈と言うことは、作者の意図したところを正確に捉えて、それを余すところなく理解するということだとすれば、「ファウスト」の正しい解釈は、作者ゲーテの意図したところを正確に捉えて解釈するということになる。幸か不幸かゲーテは、「ファウスト」について日記、手紙、対談などで折りに触れては実に多くのことを語っているのである。従って、それらを手がかりにしてひたすら客観性のある正確さを追求する「ファウスト」解釈の試みが次から次と繰り返されている。あの有名なゲーテ研究をなしたエーミール・シュタイガー自身「今日、一世紀にわたる骨の折れる作業の挙げ句、様々な分析が原典を押し流し、ありとあらゆる見解と学者の理念の寂寞たる砂の下に埋めてしまう危険が生じている。であるから、最小限の原典解釈にとどめたい。」⁽¹⁾と断った上で、やはり学者の理念の寂寞たる砂の一粒である「ゲーテ研究」の大著を世に送ったのである。

ところで、ゲーテ自身がこの作品について「(ファウストは)未解決の問題に似て、何でも人々の心を惹きつけては、繰り返して考えざるを得ないようにする」⁽²⁾とか、「『ファウスト』はまったく同一尺度ではかれぬもの(Inkommensurabeles 比較を絶するもの、一筋縄では扱えないもの)で、良識に近づけようとする試みはすべて無駄である。」⁽³⁾とか、「世界史や人類史において一つの問題がついに解決されたとしたん、それがまたもや解決さるべき新たな問題を生み出すという点では、この作品(ファウスト)もまだいろいろ問題をふくんでいるかもしれない。だとすると人の表情や目配せやかすかな暗示に習熟している連中をきっと楽しませることになるだろう。こうした人間はその上私が与えた以上のものを見つけ出すことだろう。」⁽⁴⁾()内は筆者の補足)などと、皮肉たっぷりに戯れ言(Scherze)——としか筆者には思えないが——をいっている有り様である。

このようなファウストの作者自身の言葉から結論づけられることは、「この作品は、まったく多種多様な解釈のどれにも一見正当な論拠を提供するだけの広がりと大きさを持っている」⁽⁵⁾と言うことであろう。これこそ古典と言い得る作品の絶対不可欠の条件であり、それに関心を寄せる者のそれぞれ独自のどんな解釈でもすべて許容してくれるという、真面目な

研究者でない者にはことさら勇気を与えてくれる有り難い特性なのである。

このような古典としての「ファウスト」の特性に励まされ、感謝しながら、ゲーテが与えたひとつのヒントを手がかりに、「ファウスト」解釈に寂莫たる砂の一粒を加えようと言うのがこの小論の目的である。

2. ひとつのヒント

ゲーテは、死ぬ5日前、1832年3月17日、W. v. フンボルトあてに彼の最後の手紙を書いた。

生きているうちに敬愛おくあたわざる友人諸氏に、このひじょうに真面目な戯れ (diese sehr ernsten Scherze) を捧げ、ともに分かち持ち、ご高評いただければ、文句無しにこんな嬉しいことはないでしょう。(アンダーラインは筆者)⁽⁶⁾

また、S. ボアスレーに宛てて1831年11月24日、次のように書き送っている

完結したファウストを封印した時、私はどうにもすっきりした気分になれませんでした。おおむね私と意見が一致している最良の友人達がこの真面目にいわれた戯れ (diese ernst gemeinten Scherze) にはんの僅かな時間でも戯れると言う楽しみをたちまち持てなくなる、ということに思い至ったからです。⁽⁷⁾

ゲーテは「ファウスト」を、「この真面目な戯れ」、「この真面目に言われた戯れ」と、自分で規定しているのである。すでに述べたようにゲーテは、「ファウスト」について実に多くのことを言い遺し、書き遺している。それらの全てが「ファウスト」解釈の手がかりになる。それら無数のヒントの中からどれをどのように判断して扱うかは受け止め手の側の問題である。

本論では、この「まじめに言われた戯れ」、「ひじょうに真面目な戯れ」を手がかりとして、「ファウスト」から「難解な深遠な哲理の書」という仮面を剥ぎとり、「ファウスト」のこれまでとは違った姿にスポットをあててみたい。

3. 「ひじょうに真面目な戯れ」の「戯れ」とは何か

ゲーテは、「ファウスト」は「戯れ (Scherz)」なのだという。この Scherz についてはすでに先人達によってさまざまな訳語が当てられている。例えば、「笑談」⁽⁸⁾、「冗談」⁽⁹⁾、「諧謔」⁽¹⁰⁾、「戯れ」⁽¹¹⁾、などである。どの訳語を選択するかは、翻訳に当たっての大問題であるが、それは単に一つの訳語選択の問題にとどまらず、作品全体の解釈の根本に関わる問題だからである。ところで、このキーワードを理解するのに大変示唆的なことをゲーテは、エッカーマンに語っている。

とにかくドイツ人というのは奇妙な人間だ！……かれらはどんなものにも深遠な思想や理念を探しとめ、それをいたるところに持ち込んで、そのおかげで人生を不当に重くするしいものになっている。……さあ、もういいかげんに勇を奮って、いろんな印象に熱中してみたらどうかね。手放しで楽しんだり、感激したり、奮起させられたり、また教えに耳を傾けたり、何か偉大なものへの情熱を燃やして、勇気づけられたらどうかね。⁽¹²⁾

この言葉からすると、ゲーテは、ドイツ人には遊び心とか戯れの心といったものが欠けていることを嘆き、頭ではなく、もっとこころと感性で人生をエンジョイすべきだと求めているのである。ゲーテは、「ファウスト」をまさにこのような欲求に適うものとして創ったわけである。このことは、「ファウスト」の中で疑う余地なく明確に述べられている。実は、これまで「天上の序曲 (Prolog im Himmel)」に比べると、はるかに軽い内容空疎な一場としか見られていなかった⁽¹³⁾「劇場の前芝居 (Vorspiel auf dem Theater)」こそ、「ファウスト」がどのような芝居なのかを規定づけているたいへん重要な場なのである。⁽¹⁴⁾座長 (Direktor) と道化役 (Lustige Person) の台詞の中に「ファウスト」の性格規定のキーワードが、ぽんぽん飛び出してくる。

座 長 とくに楽しませてやりたいのは大勢の名もない民衆だ、
彼らこそ生きており、他人を生かしてくれておるんだ。
柱も建て、板囲いも張りおえた、
だれもが、とびきりの楽しみを当てにしておる。
みんな、もう、まゆも晴れやかに、悠然と席に就いて、
びっくりさせてくれと待ち構えておる。
民衆の心をつかむ手だては、心得ておるつもりだが
しかし、今度ほど困ったことはこれまでなかった。
傑作を見慣れた客は、たいしておらぬにしても
みんな、めったやたらに本を読んでおる。
何から何までフレッシュで目新しく、しかも
中身も面白いものを、どう作り上げるか？

……

道化役 ……
みんな笑いが欲しいのです、笑わせてあげなくっちゃ。

……

想像ってやつに、たとえコーラスを添えましょう、
理性に知性、感情に熱情とね、
けど、いいですか！お道化のほうもお忘れなく！

座 長 ……
芝居をやるからには、芝居気たっぷりでいこう！

……

(アンダーラインは筆者)

深遠な哲理を探ると言う偏見にとらわれずに、座長や道化役の台詞を素直に受け止めれば、ここにゲーテの真意が汲み取れるのではないか？野暮で、真面目で、頭の固いドイツ人を笑わせ、楽しませてやりたい、閉じられたドイツ人の感性を解放させてやりたい、こういうゲーテの真情が伝わってくるように思われる。要するに、ゲーテは、何よりも先ず、「ファウスト」を戯れ (Scherze) として創っているのである。

Scherze のパースペクティヴを積極的に加えることは、「ファウスト」解釈のアンバランスを是正するのに役立つばかりでなく、この作品の本質を解明するためにも有効である。⁽¹⁵⁾

このような観点からの「ファウスト」解釈は、まだ主流とはなっていないが、これまで見てきたように、「ファウスト」に対するゲーテの深い思い入れを考慮すれば、このような観点こそ正統性を主張して良いのではなかろうか。

ところで、「ファウスト」は、戯れではあるが、ただの戯れではない。真面目な戯れなのである。真面目なとは、たんなる冗談では済まされない重大な問題を含んでいるということである。したがって、ここでは Scherze の意味は、二通りある。ひとつは、文字どおり人を愉しませる娯楽としての戯れであり、もうひとつは、ひじょうに重大で真面目な問題をあつかう場合、それが重大であればあるほど周囲へおよぼす影響の深刻さを慮って戯れ、もしくは冗談の衣を纏わせ、凌ぎあるいは妥協の術としての戯れである。

この二つの戯れについて、以下「ファウスト」の中に具体的に探ってみたい。

4. 「ファウスト」のエンターテインメントとしての戯れ

ゲーテは、観衆を楽しませ (behagen)、気晴らしをさせる (Spaß machen) 空前絶後の超エンターテインメントとすることが、「ファウスト」を創るもっとも根本的なモチーフであったことは、以上みてきたところすでに明らかである。そして「ファウスト」というお芝居の中には、いたるところに観衆を笑わせ、楽しませる工夫と仕掛けが、心憎いばかりに盛り込まれているのです。まさに笑いこそ「ファウスト」の生命だと言って過言ではない。

そもそも、メフィストーフェレスというこの愛すべき悪魔の存在そのものが「ファウスト」全曲の戯れの主旋律を奏でていると言って良い。ファウストに比べてメフィストのなんと生き生きとしていることか！暗と明、陰と陽、鬱と躁、荘重と軽妙、ファウストとメフィストのコントラストはじつに絶妙である。

厳肅、荘重のはずの「天上の序曲」のあの明るく陽気なムードは、まさしく、主 (Der Herr) とメフィストという際だって異質な両者の掛け合いから生まれているのだが、「ファウスト」全曲を通じてファウストとメフィストの台詞のやり取りも、基本的には同じトーンである。これは、お笑いを本領とする漫才のボケと突っ込みの掛け合いに通じるものといって過言ではあるまい。

観客を退屈させないで、舞台に惹きつけておくためには、観客の好奇心、期待、願望、欲求などに絶えずアピールしていかなくてはならないが、「ファウスト」には、それら全てに応える奇想天外な策が綿密に編み込まれている。それらの主なものを列挙してみよう。

(1) ファウストの若返り

限られた世界の中で、一回限りの人生しかいきられない人間にとって、人生をやり直すということはまさに夢である。防止することのできない老化現象を克服し、若返ることは、永遠の願望である。この夢や願望が「ファウスト」の中で実現するのである。

世界をもっとも深い内部で統べているものの本体を知るために、財産も名声も世間の栄華も、人並みの家庭生活も、恋も享楽も、およそ人間の通俗の人生の全てを犠牲にして学究一筋で努めてきた挙げ句が、「分かったのは、何も分からぬと言うことだけ！」で、老いさらばえてしまったファウストが、メフィストの援けを借りて、あの妖しく愉しい見世物的場面である魔女の厨で、見事に若返りを果たすのである。再生したファウストは、棒に振った人生をやりなおす。しかもこんどはどんな願いも叶えてくれる頼りになるメフィストを同伴者としての人生の再出発である。かれは、今やあらゆる束縛から解き放たれた者となり、時間と空間を超え、人類的体験のすべてを自ら体験し尽くそうとする。ファウストの再生とやり直しの人生は、観客にとってまさに夢であり、羨望である。しかも、舞台に展開されるのは、慣れ親しんでいる身近な俗世界から、豪華絢爛たる大世界、さらには夢幻とお伽の世界へと果てしもなく広がり、慣習を飽きさせることがない。話の筋も、甘美な恋愛メロドラマから、哀しく悲惨な大悲劇へ、さらには荘厳な宗教的ドラマへと可能な限りのあらゆるタイプのドラマが手を変え品を変えて展開されるのである。

「ファウストの再生とその人生の展開」は、このように効果的に面白さを創り出しているのである。

(2) 時間と空間の超越、タイムスリップ体験

時間と空間も人間にとって、やはり超えることのできないものである。時間と空間を超えて自由に生きたいというのも人間にとって永遠の願望である。ゲーテは、「劇場の前舞台」の最後で座長にこう言わしている。

ご承知のように、わがドイツの舞台では
めいめいが、やりたいようにやっておる。
だから、きょうは、えんりょ容赦なく
書き割りも装置も、どしどし使うておくれ。
太陽も、月も、言うに及ばず、
星もふんだんに使うてよろしい。
水でも火でも、岩でも、なんでもこい、
鳥、けだものも不自由はさせぬ。
こうして、この狭い板張り小屋のなかで
造物主の大宇宙全域を股にかけ
緩急自在に駆け巡るのだ
天上からこの世をつきぬけて地獄まで。

(アンダーラインは筆者)

この言葉どおり、舞台の上には時間と空間を超えた世界が展開される。それは、「天上の序曲」であり、「魔女の厨」であり、「ワルプルギスの夜」であるが、なんといっても圧巻は、第二部の世界である。

ファウストは、絶世の美女の誉れ高いヘレナを求めて、人造人間ホムンクルスとメフィストと共に古代ギリシャの世界へタイムスリップするのである。第二部第2幕第3場「古典的ワルプルギスの夜」から第3幕全部がそれである。ここには西欧文化に根源的な影響を与えている古代ギリシャが出現します。さまざまな神話伝説上の人々や妖怪や神がみが次々と現れます。観客はここで知識としてのみ知っている懐かしい世界を舞台を通して追体験するのである。

ファウストはといえば、ついに、ヘレナに会うことができ結婚し、一子オイフォーリオンをもうけさえするのである。これも奇想天外な劇的效果を醸し出している。

(3) 開放的なエロスの効果

人間にとって性の問題は有史以来常に変わらぬ重要な問題である。だから人間は色恋沙汰や性愛を、昔も今も、ひろく芸術の最重要のテーマとしてきた。

ゲーテが、この分野においても比類なき第一人者であったことは、既によく知られているところである。「ファウスト」においても、恋、愛、性の問題が、たいへん大きな比重を占めているのは当然である。

ファウストのグレーチヘンとヘレナにたいする恋愛劇は、「ファウスト」全曲の二つの大きな柱である。これだけでも、観客を愉しませるのに十分であるが、この道の大家である作者は、観客の色情を挑発し、舞台に釘付けにする術を施すことを決して忘れてはいない。

その最初のシーンは、「魔女の厨」で若返ったファウストが恍惚として見とれてしまうあの鏡の中の美しい裸の女体である。ファウストは感嘆している

あれこそ女性の美しさの極致！

ありうるることか、女がこんなに美しいことが？

横たわるその肢体のみごとさは

あらゆる天の美の精髓とも見えるではないか？

これほどのものが、この地上にあるだろうか？

この魔女の厨での扇情的で妖しげなエロティシズムは、ワルプルギスの夜の場面ではさらに増幅させられて舞台を制圧し、観客を圧倒するのである。

メフィストは、本性的に卑猥で好色である。だからかれの台詞には、じつにしばしばこの本性が露骨に表出されるのである。そのもっとも典型的なシーンは、第二部第5幕埋葬の場である。メフィストが、ファウストの亡骸から証文にしたがって、魂を取り出そうとした時、上方から天使の群れがファウストを連れに降りてくるのを見上げながらメフィストの言う台詞は次のようなものである。

.....

右へ左へ飛んでばかりいねえで、降りてきなよ、
手足をもそっと色っぽくうごかしてみな。
なるほど、生真面目な顔もまんざらでねえが
ちょっとだけ笑顔も、是非みせておくれよ！
きっと一生ぞくぞくすることだろうぜ。
ほら、好いた同士の交わすあのめくばせだよ、
口もとをちょっぴり緩めりゃ、それでいいんだ。
おい、のっぽの坊や、きみがいちばん気に入った、
そんな坊さん面はまるで似合わないぜ。
なあ、ちょっぴり助けえ眼で見てくれよ！
もっとまともに素肌をみせたってよかろうに
襷のある長い肌着じゃ、おとなしすぎる——
むこうを向いた——後ろから見える！——
いやはや、小童たち、しゃぶりつきたくなっちまう！

こともあろうに天使に欲情するとは、まさしくメフィストの本性がむき出しにされている。結局、ファウストは天上へ救済されていき、メフィストは、大ドジをふんで一件落着となるのであるが、これこそ戯れのなかの戯れと言うべきであろう。

(4) その他の演劇的效果を高めるためのさまざまな工夫

実際に自らいくつかの芝居を演出したこともあるゲーテは、「ファウスト」にまことに入念に劇的效果を計算した工夫をこらしている。

その一つは、登場人物毎にまた場面毎に台詞の韻律や詩形を考慮し、美しい音声的效果を図っていること。

その二つは、場面構成や舞台転換に静と動、暗と明、陰と陽、といった変化とアクセントをつけて、観客の舞台への集中力を持続させる配慮をしていること。

その三つは、音楽芸術、舞台芸術のあらゆる形式、その他の芸能のあらゆる種類、オペラ、歌曲、レビュー、ダンス、バレエ、サーカス、マジック、ショー、カーニバル等を総動員させて、「ファウスト」をバラエティーに富んだ超エンターテインメントとしていること。

その四つは、政治や宗教や学問等への風刺と批判をとりいれていること。⁽¹⁶⁾等々。

5. 真面目な戯れについて

戯れのなかに含まれている真面目な問題、あるいは、戯れとして扱っている真面目な問題としては、次の二つの大きなテーマが考えられる。

(1) ファウストと自由の問題

「自由でありたい」というのは、人間の願望の一つである。ファウストの行動の根本に潜んでいるのは、明らかにこの願望である。

自由な存在であるとは、自我の主張が全面的に許容されることを前提とする。しかし、現

実にはわれわれの生活はじつにさまざまなものによって、自我の実現は規制されている。伝統的な生活様式や慣習、義理人情、道德、掟、法制度等によって、個人の日常生活はがんじがらめにされている。だが、これらの規制は、人間が社会的存在である以上、われわれの生活にとって必要不可欠のものである。このような規制から解放されて自由であろうとすれば、たちまちこれと矛盾葛藤を惹き起し、周囲を困らせ、非難的のたされることは明らかである。

ファウストは、飽くなき自我の実現の欲求に駆られて、ただひたすら前へ前へと突き進む。しかし、所詮一個の人間の能力には限界がある。限界のある一個の人間であるファウストのためにゲーテは、ファウストの自我実現のための無限の行動を可能とするために、万能の魔法の力を持っている悪魔のメフィストを同伴者とする。魔法という超人間的な力を借りて、ファウストは、自我の欲求を次々と達成していく。

個人の日常を規制する社会的通念、常識、公序良俗、風俗習慣といったものは、その時代の社会的規範に規定され、それに適合したものとして形成されている。たとえば、金のあることはよいことだ。結婚することはしあわせなことだ。競争に勝つことはよいことだ。大きいこと、多いこと、速いことはよいことだ。勤勉で頑張ることは、立派なことだ。逆に、その反対のことは、否定的に評価される。このような常識は、近代資本主義社会の価値観にてらしてつくり出された通念である。

ところで、ファウストは、ひたむきに努力はするが、いささかもこのような社会通念に相応した努力ではない。近代社会の価値観にしたがって価値ありとされる目標達成のための努力などではまったくない。ファウストは、蓄財して金持ちになろうなどとはおもってもみないし、祝福された結婚をして幸せな家庭を持とうなどとは夢にもおもってはいない。努力して立身出世し、世間で羨望される地位と榮譽を得ようなどという意志などまったくない。人々に敬愛される信仰心厚いキリスト教徒であろうなどという殊勝な気持ちなど微塵ももちあわせていない。ファウストにあるのは、自我の成就のためのひたむきな行動だけである。

「ファウスト」の中には、ファウストの母親をはじめ家族のことや、親類縁者、友人といった日常的な人間関係は一つもでてこない。グレートヒエンとの恋も結婚などという意識とは無関係である。学問に励むのも、それによって社会に貢献しようなどというわけではない。

「哲学だ／それ法学だ、医学だと手をひろげ／余計なことに神学まで／悪戦苦闘して究めた。」(354—357)のは、「この世界の根源を突きとめ、宇宙万有を奥の奥でつなぎとめるものの正体を」(382—383) さぐりあてたいという欲求のためだけである。結局、そのような学問追求からは何もえられず、絶望にうちひしがれることになる。その結果、「なさけない！まだこの牢獄に囚われているのか？」(398)と嘆き「逃げろ！さあ！広い大地のまっただなかへ！」(418)と決意する。つまり、これは閉ざされた日常性からの自己解放の叫びである。

「ひたすら欲しがり、ひたすら成し遂げ／その上をのぞんで、力の限り／一生を猛進した。」(11437—11439) ファウストであるが、こともあろうにそのファウストが、「まだわたしは自由の境地にたったとはいえぬ」(11403)と口ばしるのである。いまやファウストは、「踏みしめる道の上の魔法を払いのけ／呪文などいっさい忘れてしまいたい。／自然よ、おまえの前に裸一貫でたってこそ／人間生きがいもあろうというものだ。」(11404—11407)と、自我の達成のために結託した悪魔の手からさえ自由になりたいと願うのである。何者にも依

存しない自由な、独立独歩の人間として、つまり、「裸一貫」で自然の前にたつこと、そうすれば苦楽はたえないし、一時として満足はえられないかもしれないが、それが人間のありかただというのである。このトーンはさらにエスカレートし、ついには

……「この地上のことは十分に知った、／天上のことは人間には見通せぬ。／まぶしげに見上げるのは愚の骨頂だ、／雲の上に自分の同類をもとめるいのは！／大地に立ちはだかり、あたりを見るがよい。／すぐれた人間に世界は口をつぐみはせぬ。／なんで永遠の国に踏み込む必要があろう！」(11441—11447)

とまで決意表明をするのである。天国も、神の恩寵も頼みとしない裸一貫の人間存在の自己主張が確信をもってなされるのである。

この主張の延長線上で、あの台詞「自由な国に自由な民とたちたいものだ」(11579—11580)があるのである。この主張の根本思想は、神の恩寵をたのみとせず、自然の暴威には協力共同の力によってこれを克服し、人間存在を高らかに賛美する断固たる意志である。

以上見てきたように、ファウストは、自我達成のためにあらゆる社会的規制からの自己解放をめざしているのである。どんな規範、どんな権威にも囚われないこのような人間の本性は、紛れもなくあのゲルマン的巨人のそれであろう。次のファウスト自身の言葉が、この巨人的本性を見事に言い表している。

……楽しみなんか念頭にない。／目のくらむ思いに身をまかせ、苦痛の極致を味わおう、／愛しさのあまりの憎しみや、胸のすく腹立ちが欲しい。／知識欲の重圧から生き返った胸だ、／いつどんな苦しみに出会おうと、受け止めてやる。／およそ人間という種族の体験できるものは何もかも／この身一つ、身魂込めて味わいつくそう。／精神一到、天辺とどん底をつかみとり／人類にふりかかる苦も楽も、この胸一つにたたみ込み／おれという一個の人間を、全人類を呑み込むまでおしひろげ／ついには人類もろとも砕け散ろう。(1765—1775)

社会的存在である人間にとって宿命的な自己規制と自由の問題は、まことに深刻な、つまり真面目な(ernst)問題であり、ファウストの自由への意志によって貫徹されるファウストの巨人的行動は、社会の秩序や、モラルと摩擦を起こすのは必然であり、世の非難、糾弾を受けて何の不思議もない。当然のことながら、この事を十分理解していたゲーテは、「ファウスト」を“真面目な戯れ”(die sehr ernstesten Scherze)として、世に贈ったのである。

(2) ファウストの不死、永遠の存続の問題

この地上での一回限りの人生をいかに生きるかと言う問題と、限りある人生を永遠の持続に繋ぎ止めたいたいという人間の願望は、時間と空間を超えて、文学のもっとも重要なテーマの一つである。ゲーテのファウストもこれが根本的に重要なテーマであることは疑いもないことである。

ゲーテは、1829年2月4日、エッカーマンに対して次のように語っている。

人間は、不死を信じるべきであり、信じる権利を持ち、また、信じるのが人間の本性に適っている。しかし、哲学者がわれわれの魂の不死であることの証明がある種の宗教伝説から引き出そうとすれば、それは極めて弱々しい営みとなり、またたいした意味を持たない。われわれの存在は、持続するものだという確信は、私にとっては、活動の概念から生まれてくるのだ。なぜならば、私が最後まで休みなく活動するとすれば、今の私の存在の形式が、私の精神のために長くは耐え得ない限り、自然はさらに一つの別の存在の形式を私に与える義務を持っているはずであるから。⁽¹⁷⁾

さらに、1829年9月1日にはこう語っている

私は、われわれの存在が持続することを疑わない。なぜなら、自然にとってエンテレヒーは不可欠のものなのであるから。しかし、われわれは、一様に不死というわけにはいかない。であるから未来に自らを大いなるエンテレヒーとして表明するためには、みずからもまた一つのエンテレヒーでなければならない。⁽¹⁸⁾

これらの見解の中に、ファウストという人間存在の本質規定をみてとることができる。要するにファウストの本質は、“行動すること”、“休みなく活動すること”である。このことを象徴的に示しているのが、「ファウスト」第一部、復活祭で賑わう市の散策から帰ったファウストが書齋で新約聖書のギリシャ語の原典をドイツ語へ翻訳する場でのファウストの言葉である。

……こう書いてある、「初めにことばがあった！」／……「ことば」をそう重くみることは、わたしにはできぬ、／……「初めにこころがあった。」／……すべてを動かし創りだすものはこころであろうか？／こうでなければならぬ、「初めに力があつた！」／……霊の助けだ！とつぜんひらめいて／確信をもって書く、「初めに行動があつた！」

ファウストにとっては、行動（die Tat）こそわが生命なのである。だが、ファウストの行動は、もっぱら自我や、我欲実現の欲求に促されての極めて利己的で、独善的なものである。このことは、第二部第5幕「真夜中」の場で、＜憂い＞との間で交わされるファウスト自身の次の言葉によって明瞭に裏づけられる。

わしは、ひたすら世界を駆け抜けてきた。／やりたいことは何でも無理やりねじふせ／気に入らぬものは、突き放し／逃げるものは深追いせんのだ。／ひたすら欲しがり、ひたすら成し遂げ／その上を望んで、力の限り／一生を猛進した。……
(11433—11439)

「ファウスト」のなかには、しばしば「努める」（streben）という言葉が用いられている。

たとえば、「天上の序曲」における主のあのあまりにも有名な言葉

Es irrt der Mensch, solange er strebt. .

(アンダーラインは筆者)

この streben をめぐっては、さまざまな解釈がなされている。

streben は、普通は「努力する」という意味である。「努力」とは、近代社会の規範の中で考えると、一般的には、良い目的に向かって、それを達成するために、あるいは何か有益な物を獲得するために一生懸命つとめること、骨を折ること、と言う意味であろう。しかし、ファウストの場合は、こういう意味ではまったくない。ファウストは、たしかに行動して止まないが、それは、努力に値する良い目標に向かってのものではない。彼にはただ、我欲の成就のためのきわめて利己的な行動があるだけである。したがって、ファウストの場合には、streben の意味は、ファウストの生命である die Tat とほとんど同義とかがえてよいのではないかとおもわれる。だとすると、この言葉の意味は、「我欲に促されて行動に駆り立てられる人間は、正しい道を踏み外し、道に迷うものだ。」ということになる。

「ファウスト」全曲にわたってのファウストの行動は、一貫してこのようなものである。道を踏み外したまま、活動しつづけ、ついにあの終局にいたるのである。

丘陵の麓に広い沼地があって、／造成地に悪臭を撒き散らしておる。／あの腐った水溜まりに捌け口をつけるのが、／最後で最高の大事業となるのだ。／幾千万の人々に土地を拓いてやる、／安穩でなくとも、働けば、自由に暮らせるように。／畑のみどりは豊かに映え、人間も家畜も／真新しい土地に、みんな気持ち良く、／そぐに住み着いて、堤防の力にたよる、／大胆、勤勉な民衆が築いた堤防に。／内陸となったここはまさに楽園、外で、どんなに高波が岸辺を襲い、／無理に侵入しようと齧りついて、／協力共同の意志が急いで傷口をふさぐ。／そう！この思想にわしは惚れ込んだのだ、／これこそまさに人智の極限、／自由と生活を享受しようとする者は／日々、これを自力で奪いとらねばならぬ。／こうして、四方危険の中でも末永く、／子供も大人も年寄りも、有為な年を重ねる。／そのような人混みを目の当たりにして、／自由の国に自由の民と立ちたいものだ。／その瞬間に向かってなら、こう言ってよい、／「止れ！おまえはじつに美しい！」と。／この地上での我が輩の日々／の足跡は／未来永劫滅びることはない。——／そういう高い幸福を予感しながら／いまこの最高の瞬間を味わおう。(11559—11586)

(アンダーラインは筆者)

本当に納得のいく人生とは、どのような人生であろうか。それは最も人間らしく生きる人生である。“人間らしい生き方”とはどういうことか。人間の二つの類的特性、社会性と労働性という二つの条件を満たしている生活をするのである。何処にもないユートピア創りの事業は、このような「人間らしさ」の条件をみたすものである。しかし、ユートピアは、非現実のものである。あくまでも未来の夢である。だから、つまるところ、つねに行動して

やまぬファウストは、夢に向かっての永遠の努力，“行動”に満足せざるを得ないのである。ファウストの理想と考える理想の国は、決して完成したわけではない。ただの予感の中で、あの瞬間に向かって「とまれ！おまえはいかに美しい！」とよびかけるのである。しかし、ファウストは、この時、徹底的にやりぬき、生き抜いた人間だけが、我が物とできる安心立命の境地にいるのである。

ファウストには、完成とか達成はありえない。それは、ゼロを意味する。完結したら、おしまいなのだ。だから、ユートピアの建設も、どこまでも建設途上でなければならないのである。ファウストの行動は、何かを達成するための行動ではない。行動によってかれは、永遠の持続に自分を繋ぎ止めるのである。弁証法的にダイナミックに絶えず変化しながら永遠に持続する世界へ、像（かたち）を変えて存在するのである。

人間は、自分が、限りある儚い存在であることを十分に認識している。だから、永遠の持続へと自分を繋ぎ止めたいと願望する。人間に与えられた想像力は、まさに天与の恩恵というべきである。このイマジネーションの力によって、絶対に実現不可能な「永遠の存在」への願望を成就させようとするのである。しかし、近代合理精神は、イマジネーションによるこの願望充足もかりそめのものに過ぎないということをよく分かっている。ゲーテは、啓蒙主義の申し子である。だから、もちろんこのことを十二分に理解している。したがって、このかりそめのことがらを「ファウスト」と言う作品の中に描くことは、“戯れ”として表現するほかないのである。

しかもゲーテは、「ファウスト」終局の場面で、いかにも荘重で神秘的なキリスト教的救済劇の装いを凝らしながら、ファウストをキリスト教的救済する神の手にはではなく、それとは似てまったく非なる「永遠に働きつづけ、生きつづけ、成生発展する力」(346)の手に委ねるあの「山峡」の場面を、最大最善の“戯れ”として、劇的效果に細心の注意を傾注して書いたのである。

テキスト及び参考文献

「ファウスト」のテキストとしては、次のものを主として用いた。

1. Erich Trunz.: Goethe Werke Band 3,, Hamburg 1953
 2. Albrecht Schöne: Sämtliche Werke Band 7/1 (Faust), Deutsche Klassiker Verlag, 1995
 3. Albrecht Schöne: Sämtliche Werke Band 7/2 (Faust Kommentare),
 4. 「ファウスト」の訳文は、主として次のものを使わせていただいた
 5. 小西 悟訳 「ファウスト」大月書店 1998
 6. 井上正蔵訳 「ファウスト」集英社 1976
 7. 山下 肇訳 「ファウスト」潮出版社 1992
- その他の参考文献
8. Horst Fleig. J.W.Goethe Die letzten Jahre Teil 2. Briefe, Tagebücher und Gespräche von 1828 bis zum Tode, Deutscher Klassiker Verlag, 1993
 9. J. P. Eckermann: Gespräche mit Goethe, Aufbau-Verlag, 1956
 10. Heiny Hamm: Goethes „Faust“, Volk-und Wissen, 1981
 11. Frank Möbus, Friedrike Schmidt-Möbus, Gerd Unverfehrt: Faust, Wallstein Verlag, Göttingen

gen 1995

12. Emil Staiger : Goethe Band 1,2,, Atlantis Verlag, 1952-1959
13. E, シュタイガー, 三木正之他訳, 「ゲーテ」(上, 中, 下), 人文書院 1982
14. 道家忠道 「ファウストとゲーテ」, 郁文堂 1979
15. 小西 悟 「現代に生きるファウスト」, NHK 出版 1996
16. 中村志朗 「時流と創作」, 東洋出版 1994
17. 柴田 翔 「ファウスト 1 部を読む」, 白水社 1997
18. 柴田 翔 「ファウスト 2 部を読む」, 白水社 1998
19. 小栗 浩 「ファウスト論考」, 東洋出版 1987

注

- (1) 上記12, s. 425, 訳文は上記13, p.231.
- (2) エッカーマン: ゲーテとの対話1831年2月13日, 上記9, s.589
- (3) エッカーマン: ゲーテとの対話1830年1月3日, 上記9, s.515
- (4) 1831年7月20日 J.H.Meyer 宛て手紙, 上記8, s.427
- (5) 上記12, S.425, 訳文は上記13, p.231
- (6) 上記8, s.550
- (7) 上記8, s.490
- (8) 上記14,
- (9) 上記16,
- (10) 上記16,
- (11) 例えば, 上記5, 15,
- (12) 上記9, s.330
- (13) 例えば, 上記17, p.20-23, では, 「(『舞台での前狂言』) は, 生の根源に関わるテーマを扱うこの作品を重苦しく停滞させることなく, 軽やかな大気のなかへ浮上させる」役割りをもつ「陽気で楽しいアチャラカ芝居風の一場面で」「『作者口上』とでも言うべきもの」と, 解釈されている。
- (14) 例えば, 上記14, 15ではこのような観方がされている。
- (15) 上記16, p.63ff
- (16) この点については, 上記15が, 詳しい。
- (17) 上記9, s.444ff.
- (18) 上記9, s.504